

025. インクジェットプリントに出会って

私がインクジェットプリントを本格的に仕事に使うようになり、今年で10年になる。それも、今の私を支えてくれる取組先メンバーがいてくれたからできたと思っている。インクジェットプリントをこんな風に使えない?御宅の会社でできない?という新たな私からの課題に、その都度答えてくれる良き若者たち、会社の壁を越え、語り合い、激論になることさえあった。

もちろんインクジェットプリントはその前から使うことはあったが、紙出力がメイン、シートやフラグといった繊維に使うことは本当にまれで、まだまだシルクプリントや手捺染による幕のレベルの方が安心、安価であった。

そんなインクジェットプリントを本格的に使いたいと思ったのは、ビックサイトの展示会に行くたびに目新しい技術はないものかという私の好奇心の触覚に触れだした大型インクジェットプリンターの出現、それに使うメディア、それを付ける道具、使う用途の加速に目が離せないようになってきたことによる。

従来の大型の外壁フラグなどは強風や台風のために、危険な高所作業での撤去、復旧に高額がかかり、おまけに写真のような美しさもない、それがインクジェットによる出力に変わること、多色を自由に思い通りの写真のようなものも可能に、素材や器具を変えれば照明入り行燈のようなものにもなる。更にメディアにシートを使うことで、看板も落下の危険もなく美しい、照明入りのコットンになり夜も美しい、ガラスなどに貼ればそれは安全に効果を発揮など…いろいろなる手法に生かせる。おまけにラミネート素材をホログラムに変えると、照明を当ててことで想像以上効果を出してくれる。これは今の私の仕事であるウィンドウや看板、装飾に効果を発揮してくれるものになった。

ファブリックにおいても、先日のTDAのIPIPのような、今までにないような、シルクやコットンへのインクジェットプリントにより、より複雑な技法や打ちに合わせたプリントなど応用したいようになってくさんの可能性を秘めたものになってきている。ロットも少なく、追加も簡単等々可能性はまだ広がる。

あとは、これをどんな素材に対応させ、何に、どう発展させていくか、特殊加工がさらにできるか等ファブリックのインクジェットに対してシートのような展開が知恵の絞りどころとなる。インクジェットの未来は、まだまだ発展途上、頑張る楽しみがあると、思う。

文責: 武藤 登子



026. 布~雑感

(日頃文章を書くこともなく、WORDを使うこともめったになく、コラムのご依頼に、布についてボツボツリと思いつくままに書いてみました。)

布を意識したのはいつからだろうか?布はあまりにも身近で皮膚感覚そのもの。おむつや産着は別として、改めて思い返すと鼻を衝く糊の匂いととも、反物の山を思い出す。

東京で生まれ育った私の家は、ALWAYS三丁目の夕日の映画そのものの、ごく普通の公務員の家庭だった。明治生まれの祖母が針仕事をしたり、時には自分の着物を洗い張りしていた姿を思い出す。長くつなげた反物を木の枝に渡し、伸子(しんし)を1本づつ形に張り、小麦粉?ごはん?で作った糊を刷毛で塗り…竹ひこの先のちくりとした針の痛みや、糊刷毛のシャッシャッという軽快な音、狭い庭、扇だまりの暖かさの中で飽きずに縫っていた。

戦争を体験した世代のせいか祖母は物を大切に、布切れをも捨ててはなかった。祖母が亡くなり遺品から愛用の腰ひもが出てきて、それはセンチにも満たない小さな端布を縫ぎ合わせて作ってあり、祖母の思いが感じられて泣いた。その末娘の母も布や手芸が好きで、いつも針が痛みを持っていったように思う。電車通園していた幼稚園の帰り道に、母は池袋のキョウカ堂に寄った。(2010年閉店した。)ご存知の方もあろうが、その頃のキョウカ堂はうす高く反物が積んであり、店員が少し高いところから大車で運び込みをしていた。見上げても奥が見えないほどの生地。生地、竹の物差しをピンピンしたく音、鼻を衝く糊と染料の匂い…子供には結構恐ろしい場所で、雑々として生地を選んでいる母のスカートのすそを握りしめ、早く帰ろうよ、とつぶやいていた。反物の中で迷子になりそうで怖かった。

服は全て母の手作りで姉とおそろい、お下がりがも着るので、同じ柄をずっと着ているわけだ。母はとても手芸が好きだったと見え、アメリカのNEEDLES WOMENSという手芸雑誌を購読していた。おしゃれではあったのだから変わったデザインが多く、母の手作りのヒトデやサゴの刺繍の服は大人には褒められたが、私はみんなが着ているようなフェルトのフードがアップリケされたスカートが欲しかったし、特にスモッキング刺繍いっぱいファンピスは子ども心にも太って見えるようで嫌いだっ。

157

そんな母の横で載ち落としの端布を欲しがって箱にためて遊んでいた。だから今でも小さな布が大好きだ。

美大に行き、陶器や樹脂もさわったが落ち着いたのはテキスタイル。布に包まれた時の不思議な感覚…ってなヤツが好きで、ツカエナイ、置き場もない、そんなものばかり作っていた。そんなツカエナイ作品?をちゃんと講評して下さった先生方には感謝している。

社会人になって2つの会社を経て、パリのデザイン会社へ、帰国後もテキスタイルの仕事にずっとかかわっている。

今は量産品の仕事が多く、使い捨てられてゆくのだらうと思いつつ、その布が誰かの暮らしのなかで少しの暖か味として存在して欲しいと願う。布が好きで、反物の山に囲まれた感覚に立ち戻るのは幼稚園のころから変わらない。

文責:小沼 京子

027. 華東交易会を終えて

去る3月1日~5日上海新国際博覧センターにて第26回華東交易会が開催された。展示面積は11.5万平米に3,600社が出展し世界117カ国から21,000名を超える来場者が簡談のため訪れた。私(インク)がこの展示会への出展をサポートし始めて5年になる。

今年は3社のブースをプロデュース、内1社は5年連続である。その1社、BY UNICO HOMEは南京の外資商社で社長はまだ40代、とても前向きで研究熱心、毎年の市場調査も欠かさず、常に新しい素材開発や生地開発を進め多彩な商品提案、売り方提案をリアル店舗から通販販売までひらく日本向け輸出事業を順調に推移させ、お客様からの信頼も得ている。

取り組みにあたり初期より、デザインを含め知財や情報の価値、重要性をしっかりと伝えてきたので、この価値を良く理解してくれている。商標、実用新案、特許を日本で申請し、権利化しているものが多々ある。もちろんBY UNICO HOMEも登録商標である。また、私が他社の特許を紹介しライセンス料を払い商品化した事案もあり、この商品は大手ホームファッションチェーンで年間約20万枚程度販売されている。一枚につき\$1でも\$200,000のロイヤリティを支払っての事になる。中国企業は、なかなかソフトの価値を認め対価を払う事は少ないのだが、UNICO社の様にソフトを理解し開発する企業が少しでも増えて欲しいものだ。

今年のUNICO社はフレンチリネンの先染め生地やサクララン織り込みのニット素材また、蓄熱で保温効果のファイバーボール中綿などを開発製品化し展示した。ブースのデザイン、カタログ制作、モニターによるプレゼン動画などはインク上海のスタッフとUNICOのスタッフが協力し完成させた。お客様の評判は上々の様でほっとしている。来場されたお客様の意見を集約、検証し更なる開発、提案のレベルアップを来年に向けスタートしたいと思っている

文責:株式会社インク 小川 久



028. 必要な時にすぐ取り出せる時代…五感はどこへゆく?

2015年4月に、FOREOという海外の会社からメイクアップマシン「MODA(モダ)」が発表された。その発売プロモーション映像をネットで見ると、「ついどこまで来たか」とため息が出た。その製品はたった30秒で、ベースメイクファンデーション、チークやアイシャドウ、口紅まで施してくれるという代物だ。このニュースをご覧になった方も多くいらっしゃるであろう。

- ①スマートフォン(専用アプリ)で自分がなりたたいメイクアップの顔写真データをチョイスする
- ②BLUETOOTH機能でMODA本体に転送する
- ③顔をMODAマシンに、覗き込むように入れる
- ④メイクアップ完了

といった具合である。MODA専用の化粧品が使用され、安全性には配慮されているそうだ。まさに、3Dスキャンや3Dプリンティング、専用アプリを駆使した新時代のマシンである。プロモーションビデオを見る限りでは、新しいライフスタイルの提案ということなのだろうが、化粧をする時の「五感への刺激」や「沸き起こる感情」、「メイクの楽しみ」はあると言えるのだろうか?化粧をするたびに向かう鏡の中に、弾けるような若さを見出す。あるいは、残酷な老いを自覚する。そんな一言一語の感情はどうなるのだろうか?Wear a mask(仮面)なのか、自分でメイクを作り出すのか、こんな選択が出来る時代になった事を喜ぶべきなのだろうか。

158